で引き継がれる意志 -in deference to a OFFICIAL FAN BOOK2 and- （後編）

アサルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
獣王ＶＳ魔装竜ＶＳ狂戦士　続く世界で引き継がれる意志　－ｉｎｄｅｆｅｒｅｎｃｅ　ｔｏ　ａ　ＯＦＦＩＣＩＡＬ　ＦＡＮＢＯＯＫ２　ａｎｄ－　（後編）

【Ｎコード】
Ｎ８９６４Ｌ

【作者名】
アサルト

【あらすじ】
『機獣新世紀ゾイド公式ファンブック２』を元ネタにした『獣王ＶＳ魔装竜ＶＳ狂戦士』の後編です。
前編はこちら（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８２０９１／）になります。

生きるという事はなにかを犠牲にする行為だ。

犠牲の上に成り立つ世界。

それでもヒトは生きる事を望む。

明日に繋がる今を維持しようとする。

否。

それはヒト特有の感情ではなく、命あるもの全てが持つ生への執着と渇望(かつぼう)。

なればこそ――

×　×　×

続く世界で引き継がれる意志　－ｉｎ　ｄｅｆｅｒｅｎｃｅ　ｔｏ　ａ　ＯＦＢ２　ａｎｄ－　（後編）

――夢だったのだろうか？

通常空間に復帰したリッツ・ルンシュテッドは真っ先にその可能性を考えた。

あまりに不可思議な体験。

しかし夢と言うには現実味（リアリティ）があり過ぎた。

だが、状況はリッツに思案する暇を与えなかった。

（考えるのは後だ。今は――）

巨大な海サソリ型ゾイドと、蒼いライオン型ゾイドが戦っている。その奥にはゾイドの残骸が散乱する朽ち果てた遺跡が見える。

（あの現象が幻覚でないとしたら、とんでもない事になる）

世界の破滅――そんな言葉がリッツの脳裏を過ぎる。

戦況は一方的だった。ライオン型ゾイド――〈ブレードライガー〉が全ての火器を撃ち込むがまるで効果が無い。

〈ジェノブレイカー〉のフリー・ラウンド・シールドでさえ悲鳴を上げる高密度ビームも、強固な装甲を持つ海サソリ型ゾイド――〈デスティンガー〉には歯が立たない。

（あの装甲を撃ち抜くには最大出力の荷電粒子砲しかない！）

リッツは〈ジェノブレイカー〉の脚部をアンカーで固定させると、即座にエネルギーのチャージにかかる。こちらの意図に気付いた〈ブレードライガー〉が射線上から退避するのと同時に、リッツは操縦桿の引き金を引いた。

荷電粒子の奔流が〈デスティンガー〉を包み込んだ。

「やったはずだ！」

思わず口にした。そう自分に言い聞かせなければ、不安が取り除けなかった。

しかし――閃光の中でなにかが動く気配がする。

「バカな……！」

〈デススティンガー〉は健在だった。その全身が青白い光を纏っている――Eシールドだ。

「くっ！」

更にリッツは荷電粒子砲を撃ち続ける。

追加された荷電粒子コンバーターにより、三十パーセントの出力アップと連続発射が可能になった荷電粒子砲を弾き返しながら、悠然と〈デススティンガー〉は向かって来る。嘲笑うかのようにメイン・カメラを赤く光らせながら――

リッツは恐怖した。こんな化け物を倒せるはずがない。〈ジェノブレイカー〉と一体になれたと感じたのも間違いだったのだ。闘争本能しか持たない〈オーガノイド・システム〉搭載ゾイドが恐怖など感じるはずがないからだ。

だが――

――グゥォァアアアッ！

萎えかけた気力を取り戻させるように、愛機が咆哮を上げた。

（……俺のためか？）

違う。〈ジェノブレイカー〉は自分を奮い立たせるために吼(ほ)えたのだ。

〈ジェノブレイカー〉の感情が流れてくるのを感じた。

恐怖。それ以上の敵意と憎悪。

（俺は……）

愛機の想いを感じたリッツは目の覚める思いだった。

気が付けば〈ブレードライガー〉が並び、高密度ビームを撃ち込んでいた。

（一点突破しようと言うのか？）

いくら〈真オーガノイド〉とはいえ、搭載されたEシールド発生(ジェネレイター)装置は人間が造ったものだ。限界はある。

「いいだろう！」

〈ブレードライガー〉のパイロットの意図を察したリッツは、荷電粒子砲を撃ち続けた。高密度ビームと荷電粒子砲。考え得る限り、このサイズのゾイドが搭載する装備としては最高クラスのエネルギーが一点に集中する。

やがてピシッと、〈デスティンガー〉のEシールド発生装置が限界を迎えて焼き切れ（ショート）した。

Eシールドを失った機体に大出力のエネルギーが直撃し、〈デスティンガー〉が爆炎に包まれた。

――今度こそやったはずだ。

だが、リッツの期待はもろくも崩れ去った。

爆炎の中から姿を現した〈凶戦士〉は頭部の装甲を失っていたが、それだけだった（・・・・・・・）。

装甲に包まれていた、『素体』と呼ばれる生身の頭部を露出させ、カメラ・ガードの奥に隠されていた双眸（そうぼう）が怒りに赤く灯った。

その姿は正に悪魔と呼ぶにふさわしい異形へと変貌していた。

「これが……〈真オーガノイド〉……」

リッツは恐れ慄（おのの）くしかなかった。

変貌した〈凶戦士〉が迫る。

荷電粒子砲の連続発射の反動で、一時機能を停止した〈ジェノブレイカー〉はなす術も無く、弾き飛ばされるしかなかった。

機体は地面に叩きつけられ、左のカメラ・アイは砕け、リッツのパーソナル・マークである『R』のマーキングを施されたフリー・ラウンド・シールドも支持腕（アーム）の付け根からへし折れた。

リッツの意識は飛んだ。

●　●　●

何も無い、ただひたすらに真っ黒い空間でリッツは、自分に背を向けて立っている女性の後姿（うしろすがた）を見ていた。

腰まで届く赤いロングヘアーの娘だ。

いつだったか、こんな背中を見た記憶がある。初めて憧れた大人の女性。

名前は確かルイゼだった。

リッツが小学校（エレメンタリー・スクール）に通っていた頃の新任の女性教師。ただの生徒と教師の関係でしかなく、憧れだけで終わった初恋の女性。

娘の姿をした〈ジェノブレイカー〉の対人インターフェイスに『名前が欲しい』とせがまれた時、不思議と彼女の姿が浮かんだ。

「――時々、思う事があります」

リッツに背を向けたまま、独り言のように、ぽつりと娘は言った。

「わたくしの存在が、アナタの在り方を歪めてしまったのではないかと――」

初めてゾイドに乗った時の事は今でもはっきりと覚えている。一発で魅せられた。最高のゾイド乗りになると誓った。

そして軍に入り、テスト・パイロットの道に進んだ。人を殺す事も、争う事も嫌だったからだ。

しかし、〈ルイゼ〉（ジェノザウラー）との出逢いが自分を変えた。

人と争う苦々しさより、相手に勝つ喜びが大きくなった。

「わたくしの力がアナタを不幸にしてしまったのではないかと……そう考える事があります」

〈オーガノイド・システム〉はパイロットの精神に影響を与える。

リッツは、〈ルイゼ〉の闘争本能に引きずられてしまった。

だが、本当にそうだろうかという思いもある。

敵に勝つ喜び。それは自分自身のものではなかったのか？

「……そうか。俺は〈オーガノイド・システム〉を、戦いの言い訳にしていただけなんだな」

自嘲気味に口にしたリッツに、娘はゆっくりと振返った。

切れ長の桃色の瞳。妖艶かつ高貴な、それでいて、どこか狡猾（こうかつ）な肉食獣を思わせる容貌。

リッツがルイゼと名付けた娘だ。

「たしかにお前と出逢って俺は変わった。だが、これは俺自身が望んだ結果だ。そして俺には〈オーガノイド・システム〉を受け入れる素養（そよう）があった。だからこれまで一緒に戦ってこられたんじゃないのか？」

「そのとおりです。アナタには〈オーガノイド・システム〉を制御出来るだけの素質があった」

「だが……〈オーガノイド・システム〉の本質には気付いていなかった」

「……そうです。しかし〈ブレードライガー〉のマスターは気付いていたようです」

「俺が奴に勝てなかったのはその差か？」

「ええ。アナタの操縦は完璧でした。ですが、アナタはわたくしの想いまでは理解し切れていませんでした。しかし〈ブレードライガー〉のマスターは、その感情まで理解していた。だから人機一体となれた。正直、わたくしは〈ブレードライガー〉が羨ましかった――」

ためらうように〈ジェノブレイカー〉の化身の娘は告白した。

「……すまなかった。俺は独り善がりだったんだな。心をねじ曲げられてまで戦ってくれていたのに、そんなことにすら気付いてやれなかった」

リッツは自分の不甲斐無さを呪った。

だが――

「まだ遅くありませんわ。アナタは今、やっと本当のゾイド乗りとなったんです。わたくしが真に認めたマスターに」

娘の言葉に、はっとしてリッツは顔を上げた。

「俺でいいというのか？」

「アナタでなくては意味がありませんわ」

そう言ってリッツを見つめるルイゼの顔には、満面の笑みが浮かんでいた。それはリッツがかつて想いを寄せた女性の笑顔そのものだった。

それだけでリッツは救われたような気がした。

「――外の状況はどうなっている？」

「〈ブレードライガー〉が戦っていますが、状況は芳(かんば)しくありません」

それはそうだろう。二対一でも押されていたのだ。

「戻ろう。奴を倒すのがお前の目的なのだろう？」

「少し違います。我々の（・・・）――ですわ」

冗談ぽくルイゼは言った。

「……そうだったな。まずは〈デススティンガー〉だ。それから〈ブレードライガー〉とも決着をつける――付き合ってくれるか？」

「無論です。アナタはわたくしのマスターなのですから」

ルイゼは優雅に微笑みながら答えた。

「なんとしても〈デススティンガー〉を止める。行くぞ――ルイゼ」

「イエス。マイ・マスター」

●　●　●

行動を停止した〈ジェノブレイカー〉から目を逸らすため、アーサー・ボーグマンは愛機を〈デススティンガー〉に向けて走らせた。

新たに追加された強化パーツ――『アタック・ブースター』を装備した機体は便宜上〈ブレードライガーAB〉と呼称される。これにより加速性能と砲撃能力は強化されたが、それでも〈ブレードライガー〉の本領は接近戦でこそ発揮される。

両サイドにレーザー・ブレードを展開し、全てのブースターを噴かせる。時速三百キロを越える蒼い弾丸そのものとなった機体が〈デススティンガー〉に肉薄する。深追いはせず、確実に打撃を与えては距離を取る――一撃離脱戦法。

しかし、そのことごとくを〈デススティンガー〉は腕部のハサミ（バイト・シザーズ）とレーザー・カッターで弾き返す。巨体からは想像もつかない反射速度と、節足による超信地旋回による迎撃。

何度となく攻撃は防がれる。だが、アーサーはそれでも攻撃を繰り返した。

時間稼ぎだ――〈ジェノブレイカー〉が復帰するまでの。

しかし、すでに十回を越える超高速による斬撃で、アーサーの体力は限界に近づいていた。

相手の動きが鈍るのを待っていたかのように〈デススティンガー〉が反撃に転じる。荷電粒子砲を除く全兵装を斉射し、〈ブレードライガー〉の退路を断つと同時に、相対距離を詰め――

「なにッ！？」

〈デススティンガー〉の腕が伸びた（・・・・・）。

左腕の攻撃をアーサーは咄嗟（とっさ）に愛機を左に跳（と）ばし避けるが、レーザー・ブレードの基部を右腕に掴（つか）まれ、吊（つ）るされるように機体が持ち上げられる。

更に追い撃ちをかけるように尾までが伸張し、荷電粒子砲の砲身（バレル）が〈ブレードライガー〉の腹部を貫通した。

その衝撃で掴まれていたレーザー・ブレードは基部からへし折れ、数メートルの距離を飛ばされた〈ブレードライガー〉は、更に地面を力なく転がされた。

けたたましくコクピットに鳴り響く警告音を無視し、アーサーは確かめるように愛機の状態を感じた（・・・）。

損害状況を確かめるまでもない。致命傷だ。

人間にとっての心臓以上の意味を持つ、金属生命体の中枢（コア）――ゾイドコアをやられたのだ。

間もなく〈ブレードライガー〉は――死ぬ。

だが――

〈獣王〉は立ち上がった。

――グゥルルルルォオオオンッ！

自分を鼓舞するように咆哮を上げた。

「そうだ……まだ――まだ終わりじゃないッ」

ここで自分たちが負けるのは、ゾイドとヒトの関係を否定するという事を意味する。

それはゾイド乗りであり続けた自分をも否定する事だ。

それだけは認められない。認めてはいけない。

アーサーは額（ひたい）からの流血を右手で拭（ぬぐ）った。左腕は折れてしまったのか、感覚は無く、動かす事も出来ない。出血のせいか、視界も霞（かす）んで見える。

それでも右腕だけで操縦桿を握り、『動け』と命じる。

ゾイドの操縦における操縦桿などの類（たぐい）は、ヒトがゾイドへ命令を送るための仲介装置（インターフェイス）でしかない。極論すれば、精神リンクだけで――『思う』だけでゾイドの操縦は可能なのだ。

愛機と心を通わせる事が出来るアーサーは、これまでもごく当たり前にそうしてきた。

霞む目を閉じ、視覚を〈ブレードライガー〉と同調させる。

とたんに視界が閃光に包まれた。荷電粒子砲の一閃。

止(とど)めをさすつもりだったのだろう。

だが、直前で〈ブレードライガー〉の展開したEシールドがそれを受け止めた。

荷電粒子砲の照射は続く。

避ける訳にはいかない。すぐ真後ろには未(いま)だ停止したままの〈ジェノブレイカー〉がいる。

（あと何秒もつ……？）

〈ブレードライガー〉はもはや限界だ。

（よお、若いの……お寝んねするにはまだ早いだろう――？）

アーサーは息子を気遣う父親のように、意識だけを背後に向けた。

〈ジェノブレイカー〉の目(カメラ・アイ)に光が灯ったのは、それとほぼ同時だった。

●
●
●

眩(まばゆ)い光が世界を覆っている。

荷電粒子砲とEシールドの膨大なエネルギーが対消滅を起こし、光を拡散させているのだとリッツは理解した。

自分たちを護るように立ちふさがっている〈ブレードライガー〉の腹部からは、血を思い起こす液体燃料(オイル)と、骨を思わせる構造材(フレーム)が覗いている。

一目で判る――もう長くはないだろう。

リッツが〈ジェノブレイカー〉をなんとか立ち上がらせる。〈ブレードライガー〉程ではないが、こちらの損傷も激しい。

〈ブレードライガー〉がわずかに首を振り、身振り（ジェスチャー）で何かを伝えようとしていた。

（まだ何かやろうというのか？）

〈ブレードライガー〉のパイロットは、この期に及んでもまだ何かやろうとしている。

（いいだろう――）

その意図を酌(くん)だリッツは、愛機を頷(うなづ)かせ、応えとした。

〈ジェノブレイカー〉が右へ跳ぶと同時に、〈ブレードライガー〉はEシールドを解除して左へ跳んだ。

『阿吽(あうん)の呼吸』とでもいうのか、示し合わせたように二機のタイミングが合った。

どちらから潰すべきか――一瞬だが、迷うような挙動を見せた〈デスティンガー〉だが、すぐに狙いは決まった。まずは損傷の激しい〈ブレードライガー〉から。

複数を相手にする場合、狙いやすいものから排除する。戦術の基本だ。もっとも〈デスティンガー〉にそんな思考回路があるのかどうかはリッツには判らなかったが。

「そう易々と――！」

荷電粒子砲はまだ使えない。脚部のウェポン・バインダーからありったけのショックガンとミサイルを撃ち放し、わずかでもこちらに注意を引く。

〈デスティンガー〉の荷電粒子砲が閃き、全弾撃ち尽くしたと同時に切り離し（パージ）したウェポン・バインダーが消滅したのが見えた。

鳥肌が立つ。荷電粒子砲を向けられる恐怖を初めて実感した。

悔しいが認めるしかない。技術や経験だけではない、度胸でも〈ブレードライガー〉のパイロットに負けている自分を。

「――だとしてもッ」

なおさら、こんな所で死ねない。

最高のゾイド乗りになるためには生きなくてはならない。

リッツは更に愛機を加速させる。

更に追撃をかけようとしていた〈デスティンガー〉を、次は高密度ビームが襲う。〈ジェノブレイカー〉とは逆方向から迫る〈ブレードライガー〉に、忌々しげに対応する。

背部の装甲が裂け（・・・・・）、隙間からシャワーのように迎撃レーザーが射出され〈ブレードライガー〉を襲う。

〈真オーガノイド〉の自己進化の発現――それは自己修復・自己増殖に並ぶ〈デスティンガー〉の能力（ちから）だ。

Eシールドはもう使えない。最小限の動きで、直撃だけを避ける。〈ブレードライガー〉の機体が少しずつ削られていく。

（早く……早くッ――）

ようやく目的の場所にたどり着いたリッツは目的のものを〈ジェノブレイカー〉に掴ませると、機体を反転させ〈デスティンガー〉に向けて突進した。

いち早く〈デスティンガー〉にたどり着いた〈ブレードライガー〉は残った右側の追加パーツをパージし、同じく片側だけ残ったレーザー・ブレードを展開する。

リッツには〈ブレードライガー〉の動きが見えなかった。

レーザー・ブレードで〈デスティンガー〉の左腕を斬り飛ばし、残った右腕に牙（レーザー・サーベル）で食いつき、その動きを封じた。

『手負いの獣』――そんな表現がリッツの脳裏に浮かんだ。

しかし、それも一瞬。

次の瞬間には〈ブレードライガー〉の機体は、ほぼゼロ距離からの雨のような迎撃レーザーで砕け散っていた。

「――ッ！　うぁあああああああああああああああッ！」

リッツは悲鳴にも似た絶叫を上げた。

（死んだ――のか？　あのパイロットが……）

仇。敵。憎悪。殺意。失意。落胆。怒り。

あらゆる心情がごっちゃになり、リッツの感情が爆発した。

〈ブレードライガー〉とそのパイロットが稼いだ一瞬――だが、その一瞬で充分だった。

爆発的な加速で超近距離（クロス・レンジ）に入り込んだ〈ジェノブレイカー〉は、〈魔装竜〉と呼ばれる所以（ゆえん）でもあるフリー・ラウンド・シールド――その内に内蔵された一対の特殊チタン合金の刃（エクス・ブレイカー）を構え、迫ってきた尾を受け止めた。

左側のフリー・ラウンド・シールドは失われているが、その左腕には先ほど回収した切り札が握られていた――〈ブレードライガー

〉から託されたレーザー・ブレード。恐らくは〈デスティンガー〉との戦いで引きちぎられたのだろう。

「うぉおおおおおおおおおおおおおおおッ――！」

渾身の力でそれを〈デスティンガー〉のむき出しの頭部に突き立てた。

――ギィィィィシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

断末魔の叫びを上げながら悶絶する〈デスティンガー〉。

〈ジェノブレイカー〉はさらにレーザー・ブレードを縦に引き、その頭部を斬り裂いた。

もはや抵抗力を失った尾をエクス・ブレイカーで両断し、迎撃レーザーの射出口が覗く背部の裂け目に爪(キラー・クロー)をねじ込み、装甲を力まかせに剥(は)ぎ取り、露(あらわ)になった素体部分にレーザー・ブレードを突き立てた。執拗(しつよう)なまでに、何度も何度も――

その行為は超硬度のレーザー・ブレードが砕け、〈デスティンガー〉が完全に沈黙するまで――リッツの理性が戻るまで続いた。

「――はぁっ、はぁ……はぁ……」

力を失いくず折れた〈デススティンガー〉からは目を離さずに、呼吸を落ち着かせようとリッツは深呼吸をした。

すると、〈ジェノブレイカー〉が促(うなが)す様に低く吼える。

「……判っている。後始末だろう」

荷電粒子砲の状態を確認し、発射体勢に移行する。目標は朽ち果てた古代遺跡――そこに蠢く〈デススティンガー〉の幼体。

だが、リッツは思う。彼等に何の罪がある？

生まれたばかりの赤ん坊と同じだ。まだ（・・）何もしてはいない。

彼等にも生きる権利がある。それを自分たちに都合が悪いからと言って奪っていいのか？

しかし、彼等がこのまま成長を続ければ自分たちが脅(おびや)かされる。

『おれたちも生きなきゃならん』

〈ブレードライガー〉のパイロットの言葉が脳裏を過(よ)ぎる。

ここで撃たねば彼の死が無駄になる。

だから――

「――貴様たちは居ちゃいけないんだッ！」

自らを奮い立たせる様にリッツは叫ぶと――引き金を引いた。

荷電粒子の奔流（ほんりゅう）が遺跡を、〈凶戦士〉の子供たちを包み込んだ。

大量の悲鳴と怨嗟（えんさ）の叫びが響き渡るのを、リッツは聴いた気がした。

吐き気がする。命を奪う事を嫌っていた自分が、無抵抗な、何百という生命を葬り去っている事実に。

（許せとは言わん……）

口には出さなかった。所詮（しょせん）は自分を慰めるための、独善的な自己満足に過ぎないのだから。

朽ち果てた古代遺跡が業火に包まれ、夜明け前の空を赤く染めていた。

●　●　●

〈クレイジー・アーサー〉。

その渾名（あだな）は敬意であると共に、侮蔑（ぶべつ）を意味するものでもあった。本来なら将軍の地位を得て、前線に――戦場そのものには出ずに指揮を執る司令官になっていてもおかしくない実績と経歴（キャリア）を持ちながら、昇進を拒み続けた彼に対する。

ゾイド乗りであり続けるためには止むを得なかった。
それがある種の責任放棄である事も自覚していた。
それでもゾイド乗りであり続けたのはアーサーのわがままだった。
だから未来ある若者に道を示せたのが彼は嬉しかった。
ゾイド乗りとして出来る事があったのが嬉しかった。
自己満足かもしれない。決着をつけられず、勝手に後を任せた事を〈ジェノブレイカー〉のパイロットは恨んでいるかもしれない。
だが、それでもアーサーは満足だった。
「――我が主(あるじ)よ」
物静かな、だが凛とした声がアーサーを呼んだ。
「よお、アイナ。戦いはどうなった？」
疑問と言うよりは、予想を確認するような口調でアーサーは声の主に目を向けた。
一見、少年のようにも見える中性的な容貌の少女がすぐ傍(そば)に居た。短めに切りそろえられた青い髪と、意志の強そうな黄色の瞳が印象的な小柄な少女だ。
「〈ジェノブレイカー〉とその主が、やってくれました」

そう言うと、アイナと呼ばれた少女は薄く笑った。

「そうか、なら思い残す事はもうない。おまえさんを巻き込んだのはすまないと思ってる」

「気遣いは無用です。先ほどの言葉に嘘偽(うそいつわ)りはありません」

そう応えた少女の表情は誇りに満ちていた。

『私は、私を理解してくれる主と出逢えた。これ以上――なにもいらない』――アイナがそう言ってくれたのは憶えている。だがそれでも、アーサーは言わずにはいられなかった。

「すまない」

「……いいえ」

対する少女は困ったような表情をしていた。

ただひたすらに黒い空間が不安定に揺らいだ。

「……間もなくこの仮想空間も閉鎖されます」

それはアイナの――〈ブレードライガー〉の死が近い事を語っていた。

「何か……望む事はありますか？」

出来る事など限られている。

それでもアイナは主のために何かしたかった。

「……家族が居た」

アーサーはぽつりと口にした。

「妻と娘だ。開戦の前に別れて、今は東方大陸に居るはずだ」

アイナは黙って聞いた。

「おれが仕事に――ゾイドにばかりかまけてたら、愛想を尽かされてな」

自嘲気味にアーサーは笑った。

家庭を蔑ろ(ないがし)にしていた訳ではない。だが、彼の気持ちは常にゾイドに向いていた。近しいが故に家族はそれを敏感に感じていただろう。

「娘が十五歳になったのを機に家族と別れた。戦争が始まれば、真っ先に死ぬのがゾイド乗りだ。死ぬつもりは無かったが、待つ方は辛かったんだろうな……いや、言い訳だな」

アーサーは一度そこで言葉を切り、続けた。

「おれはヒトを愛せなかった……いや、ゾイド以上には愛せなかった。ゾイドに乗らない自分が想像できなかった。ゾイド乗りでなくなったら、おれには何も残らない様な気がした」

老兵は続けた。心の内を懺悔(ざんげ)する様に。

「『アイナ』は娘の名前だ……未練だな。今になって家族の事を思い出すなんぞ、勝手にも程がある――」

目の前に居る少女(アイナ)と、名前の元になった娘(アイナ)に共通点は少ない。せいぜい年齢くらいだ。妻に似て可憐で、よく笑う娘だった。

「――私には……」

沈黙を破ったのは相対する〈ブレードライガー〉の化身の少女だった。

「私には家族や父親という概念は判りません。しかし、貴方が父親であったのなら、その者は幸せだったと思います」

無言を嫌うかのように少女は続ける。

「少なくとも、私にとって貴方が最高の主であった事実に変わりはありません。私は貴方に出逢えて――幸せでした」

「……」

はっとして、自分を見つめるアーサーから視線を逸らす。

「すみません……あくまで私の勝手な主観です。忘れてください」

やや顔を赤らめて俯(うつむ)いた少女に、アーサーは娘の面影を見た気がした。それは初めてこの少女に逢った時にも感じた。だから、感傷だと判っていながら、少女に娘の名前を付けた。

「ありがとう、もう充分だ。おれにとってもおまえさんは最高の相棒だったよ――アイナ」

「……」

咄嗟(とっさ)に返す言葉が浮かばず、アイナと呼ばれた少女はただ頷(うなづ)いた。

「歳かな、少し疲れた。ちょっと休ませてもらうよ……」

アーサーは息を吐(つ)くと、静かに目を閉じた。

「……おやすみなさい。良い夢を……我が最高の主よ――」

眠りに就(つ)いたアーサーの表情は安らかだった。少なくともアイナにはそう見えた。

●

●

●

〈ブレードライガー〉の機体は砕け、パイロットの遺体も発見できなかった。

今なら判る。自分は彼に魅せられたのだ。

それを認めたくなくて勝つ事に拘(こだわ)った。〈オーガノイド・システム〉に、〈ジェノブレイカー〉の闘争本能に身を任せたのだ。

どんなパイロットだったのだろう。

あの不可思議な空間で彼と出会い、言葉を交わしたはずなのに、顔も名前も思い出せない。

しかし、握手をした手の感触だけは確かに憶えている。あれは夢ではなかったはずだ。

自分は彼のようなゾイド乗りになれるだろうか。

夜が明けていく。

その朝焼けよりも更に眩(まばゆ)い光が西の空を赤く染め上げていく。

続いて爆発音が遥か遠くから聴こえて来る。

共和国軍が、西方大陸における帝国軍の最後の砦――ニクシー基地の砲撃に成功したのだろう。

ヘリック共和国軍が投入した〈ウルトラザウルス〉と、それに積まれた決戦兵器『ウルトラ・キャノン』。共和国軍の防衛線を突破し、それを破壊するのがリッツの任務だった。

しかし、彼は任務を果たせなかった。惑星Ｚｉを救う英雄的行為だったとはいえ、それで多くの仲間を救えなかった。ガイロス帝国

は西方大陸戦争に敗れたのだ。

今さら軍には戻れない。

「俺はどうすればいい……？」

リッツは愛機を見上げるが、答えは返ってこない。

しかし彼には判っていた。自分が何をすべきか。

この戦いで〈ジェノブレイカー〉の、〈オーガノイド・システム〉に狂わされたゾイドの悲しみを知った。

なら、自分がすべき事は……。

「――〈オーガノイド・システム計画〉を止める」

自分に言い聞かせるようにリッツは言った。

〈オーガノイド・システム〉の苦しみからゾイドを、愛機を救うために。〈ブレードライガー〉のパイロットもそれを望んでいる気がした。

「行こう――〈ルイゼ〉！」

リッツが愛機の名を呼ぶ。

その声に応える様に〈ジェノブレイカー〉――〈ルイゼ〉は咆哮を上げた。

その後、リッツ・ルンシュテッドの消息は公式には確認されていない。

帝国軍の記録には、ただ『消息不明』とあるだけである。

エピローグ　～続く世界と繋がる物語～

――ドクン……。

ジェノブレイカーが去った戦場跡で、小さく鼓動（こどう）が鳴った。

――ドクン！

それは確かな胎動（たいどう）の音。

――キィシャアアアアアアアアアアアアアアアッ！

仮死状態だった〈デスティンガー〉が――正確には〈真オーガノイド〉の自己防衛プログラムがそのゾイドコアを再起動させた。

（我は――間違っていたのか？）

残されたわずかな意識で考えた。

（これは報（むく）いなのか？）

多くのゾイドの命を奪った。

（これが罰なのか？）

同じ数だけ子供たちを生み出した。

（我は――ただ、さびしかったのか？）

混乱する。それは人間の感情だ。

（――人間とは何だ？）

本能しかなかったはずのそれが、自ら思考していた。

自分を倒した二機のゾイド。彼等は異物と――人間と共に在った。

（人間の存在が彼等を強くした？）

知りたいと思った。

その想いが生存本能と結びつき――奇跡が起きた。

気が付けば『彼女』はそこに居た。

視界が低い。

見上げれば間近にかつての自分の機体（からだ）があった。朽ち果てたそれは〈デススティンガー〉と呼ばれていたものだ。

「……」

自分の姿を確認する。腕がある、脚がある、しかしそれは――人間のものだ。

散乱する瓦礫(がれき)の中に、反射性の強い装甲板の破片を見つけ、自分の姿を映した。

「――！」

そこには人間の少女が映っていた。無造作に短めに切られた黒髪、そして真紅の瞳。

腕を上げ、手を頬(ほお)に当てる。思考したとおりに装甲板に映った少女が動いた。掌(てのひら)には柔らかい感触と体温を感じる。

間違いない。この少女は今の自分の姿だ。

「……どうして――？」

もう一度かつての自分(デスティンガー)を見上げた。

無論、問いに対する答えは無い。

ふと見ると、戦場跡に存在するには不自然な、石碑(せきひ)の様な物が目に入った。

彼女には判らなかったが、それは墓標だった。

『私の知りうるかぎり最高のゾイド乗りここに眠る。その勇気、その決断力、その魂は、帝国・共和国の壁を越え、すべてのゾイド乗りの指針となるべきものである』

そこにはそう書かれていた。

初めて見る文字のはずだが、彼女はその意味を認識できた。

「……ゾイド乗り……魂――？」

引っ掛かりを感じた単語を口にして、彼女は途方に暮れた。

どうすべきか、彼女は知らなかった。

何をしたいのか、彼女には判らなかった。

「私は――だれ……？」

否。彼女は知っている。

「……アル、フィーネ……アルフィ……」

ふと、浮かんだ名前――

「私はアルフィ……終焉へ――」

判らない。『向かう』者なのか、『導く』者なのか……。

物語は、想いは、意志は紡(つむ)がれる。

新たな未来(せかい)へ。

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8964l/

獣王VS魔装竜VS狂戦士　続く世界で引き継がれる意志 -in deference to a OFFI

2010年10月22日08時50分発行